小規模多機能自治の推進について

内田　勇 議員

町長　町と地区住民とで取り組み可能な方法を模索したい

問 雲南市では、6年前頃から取り組まれている「小規模多機能自治」の推進は、自治を回復し、まち・むらの課題をまち・むらの力で解決するため、「協働」をテーマに取り組まれている。

奥出雲町でも、これまで地域づくりを担っておられた元気な前期高齢者が後期高齢者となり、高齢化率やひとり暮らしの世帯率を考えれば、小規模多機能自治を推進すべきだ。

答 小規模多機能自治は、雲南市が中心となって提唱した地域自主組織のあり方であり、「地域のことは地域で解決する」をモットーに、行政と住民との協働で問題解決に取り組まれている。

町と地区住民とで取り組み可能な方法を模索したいと考えている。

問 今できることから協働で、高齢者の見守り、また配食サービスや健康づくり、買い物支援などが必要だ。

住民自らが事業やサービスを担い、住民同志が支え合うネットワークを築き、暮らしを守る地域運営組織が必要である。

答 雲南市では、小学校区単位で地域自主組織が運営されている。

奥出雲町にも、地区の振興会や福祉振興協議会はあるが、地区の主体的な運営までには至っていない。

小規模多機能自治や、小さな拠点づくりをしていく上で、地区の主体的な運営ができ、地域にふさわしい組織の形を協議していきたい。

問 里山を守るための竹林伐採について、オロチの深山きこりプロジェクトにならって、竹切りプロジェクトを立ち上げて、繁茂する竹林退治の取り組みはできないか。

答 平成24年に、各地区に竹チッパーを配置した。

特に里山の保全と循環する地域づくりに貢献されている仁多郡林業研究グループは「健全な森を次世代に!」を合い言葉に、繁茂する竹やぶ10a程度を毎年伐採、チップ化され、キャパシタの電極材の原料として年間10t程度出荷されている。

支援策も講じて、少しでも竹が少なくなるような施策を検討したい。

問 「ピロリ菌から胃の健康をまもる」と題して山陰中央新報健康フォーラムがあり、東京大学大学院の畠山教授は、

①日本人のがん死亡率1位は肺がん、2位は胃がん、3位は肝臓がんで、胃がん10万人当たりの死亡率は世界一である。日本は胃がん大国といわれて毎年5万人が亡くなっている。

②全世界の80％の胃がんはピロリ菌によるもので、日本は98％がピロリ菌が原因である。

③日本人は2人に1人はピロリ菌を持っており、10人に1人は胃がんを発症している。ピロリ菌を除菌することで胃がんを根絶できる。

と話されたが、特定検診時に検査や除菌の実施を。

答 ピロリ菌は胃がんの危険因子だが、必ずしも胃がんになるわけではないので実施はしない。

山陰中央新報健康フォーラム

ピロリ菌から胃の健康をまもる

～プロバイオティクスの可能性～

日時 2016年3月26日(土) 14:00～16:30 (開場13:30)

会場 くにびきメッセ 多目的ホール

健康フォーラムの資料から